

シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷 —キルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査(2023)—

櫛原 功一 帝京大学文化財研究所准教授
山内 和也 帝京大学文化財研究所教授・所長
平野 修 帝京大学文化財研究所研究員

The Foundation and Development of Suyab, an Ancient Multicultural Trading City of the Silk Road: Excavation of Ak-Besim, Kyrgyz Republic (2023)

KUSHIHARA Koichi Associate Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
YAMAUCHI Kazuya Professor, Director, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
HIRANO Osamu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

1. 調査の概要

帝京大学シルクロード学術調査団およびキルギス共和国国立科学アカデミーの共同調査団は、2023年4月19日～5月19日、中央アジアのキルギス共和国北部、チュイ州に位置するアク・ベシム遺跡(スィヤブ、碎葉)で調査を実施した。調査地点はアク・ベシム遺跡シャフリスタン1の東方キリスト教会址(AKB-8区)、シャフリスタン2(碎葉鎮城)の中枢部(AKB-15区)である。

アク・ベシム遺跡は5・6～12世紀頃のキルギスを代表する都市遺跡で、ソグド人の交易都市として出現し、玄奘三蔵が訪れた7世紀前半には西突厥の政治的拠点として栄えた。7世紀後半に唐が西突厥と争い、679年に安西四鎮のひとつ、「碎葉鎮城」を建設したが、唐の支配は短期間で、8世紀の初めに唐は撤退した。その後、突騎施(テュルギシュ)や葛邏祿(カルルク)がこの地を拠点としたが、カラハン朝が台頭した10世紀に政治的、経済的な中心はベラサゲン(プラナ遺跡)やナヴィカト(クラスナヤ・レーチカ遺跡)に移ったため、11世紀頃より衰退し、12世紀代には完全に都市機能を失ったと考えられている。

アク・ベシム遺跡は、都市プランが長方形を呈したシャフリスタン1と、その東側に城壁を共有するようにしてシャフリスタン2が隣接した珍しい複合構造であったことが1966年撮影の航空写真から知られている(図1)。現在、シャフリスタン1は一段高い丘として良好に残り、南西角に望楼のようなツイタデル(統

治者の居館)、南東には東方キリスト教会址があり、東西、南北の門をつなぐように交差した大通りの痕跡が地表面に残っている。その交差点付近の街路区(AKB-13区)において2011年より東京文化財研究所が調査を開始し、それを引き継いだ共同調査団が2016年より継続的に調査を実施し、7世紀代の居住面まで掘り下げたが、2021年より調査対象をAKB-8区に移している。一方、シャフリスタン2は1970年代の耕地化によって大半の城壁や遺構の痕跡を失ったが、1990年頃に偶然発見された「杜懷宝碑」、共同調査団による2017年の多量の瓦、2018年の卵石散水の発見などにより、今日ではシャフリスタン2が唐の碎葉鎮城であることが確定的となった。



図1 1966年の航空写真



図2 AKB-8区全景

2. AKB-8区(東方キリスト教会址)

東方キリスト教会址(図2、3)はシャフリスタン1の東南隅に位置する。ここでは1996～98年にG. L. セミョーノフによる発掘調査が行われ、出土したコインや壁画のモチーフなどにより10～11世紀のキリスト教会とされてきたが、その年代観には疑問も多い。共同調査団では教会の建造年代、シャフリスタン1の東側の城壁(東壁)との関係性などを明らかにするため、2023年に4箇所の試掘調査を実施した。

トレンチ3は、シャフリスタン1の東壁とキリスト教会址の東壁との間をつなぐようにして東西方向に設定した調査区である(図4)。2017年の調査で、城壁の脇に深い落ち込みの存在が確認されていたため(AKB-16区)、調査区を再設定して調査した結果、シャフリスタン1の内側に東城壁に沿って幅25m、深さ2～3mの大規模な壕状の遺構が確認された。壕の下層出土の獣骨の年代は7世紀後半代であり、東側城壁の版築状断面から出土した炭化物もまた7世紀後半代であったことから、壕と城壁の構築時期は、ともに碎葉鎮築城段階と判明した。また、シャフリスタン1の平面プランは、線対称ではなく、キリスト教会址の幅で東側に拡張されているようにみえることから、シャフリスタン1の平面プランが改修された可能性が指摘されている(山内 2019)。したがって、碎葉鎮城の西側城壁を構築したさい、碎葉鎮側からすれば城壁外側に壕を掘削して土を利用したことが考えられ、城

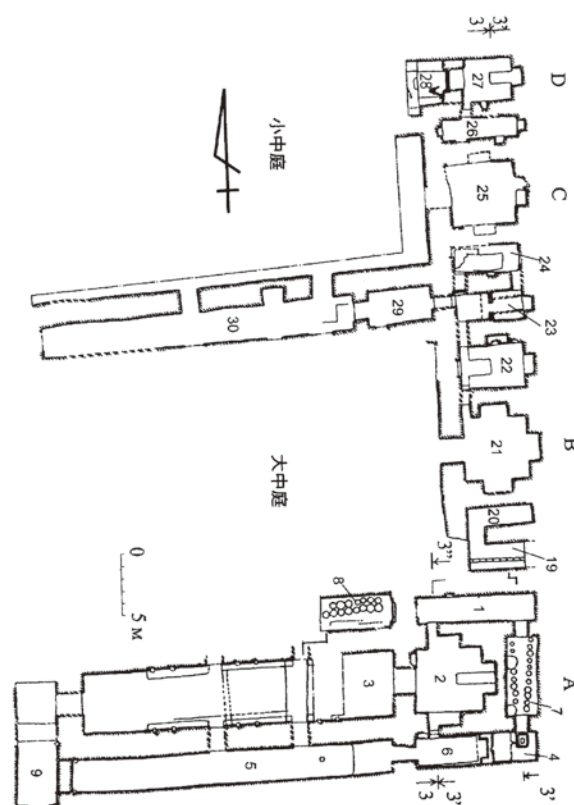


図3 東方キリスト教会址平面図

壁と壕は同時に形成されたことがわかる。さらに壕の覆土中には生活遺物が比較的少なく、覆土上層には、教会の壁寄りに11～12世紀の生活面が存在することから、8～9世紀頃には一気に壕が埋め戻されたことが推測された。その埋め土とされた覆土の由来については、シャフリスタン1の旧東壁が教会付近、あるいは



図4 AKB-8区トレンチ3全景



図5 トレンチ2小札出土状況

は教会西側に存在したことを想定でき、埋めた時期については、唐の撤退後と推測したい。さらに教会が建築されたのは壕の埋め戻しの後で、城壁同様に水性堆積層の面を整地し、教会のパフサ・ブロックの壁が積み上げられていることが明らかになった。このように、壕や東側城壁は水性堆積層を掘り込んでいることから、もともとこの一帯には湿地帯もしくは緩やかな水流が想定され、シャフリスタン1の周囲にそうした環境が存在したことがわかる。壕を埋めた時期と支配者については、憶測ではあるが突騎施の蘇祿の可能性があり、キリスト教会址については、ティモテの書簡から8世紀末創建の首都大司教の教会址の可能性があることが指摘されている(山内・岡田 2020)。

そのほか、トレンチ2はキリスト教会址の東壁の出入口外側に設定したトレンチである。この地点では、土器片や動物骨片といった遺物が多数出土したほか、大量の鉄製の鎧の小札や環状の鎧の部品、鉄鏃などが集中的に出土した(図5~7)。小札には鍍金を施したものがあり、通常の小札のいくつかに確認されている



図6 小札



図7 方形の小札

ほか、大型製品で鍍金をした装飾板があり、相当に格が高い鎧(札甲)であったと思われる。小札が集中する層位の年代は、獣骨の年代測定によれば11世紀代で、教会が廃絶したのち、この一帯で戦闘が繰り返されたことを示す遺物と推定される。

トレンチ6は、キリスト教会複合体Bの中庭(大中庭)に設定したトレンチで、深さ1.9mの断面には3面程度の礫敷きの路面遺構が確認された。年代測定データを勘案すると、7世紀後半代~11世紀頃であり、教会址の壁がどの面に構築されているのかが今後の課題となる。

トレンチ7は、キリスト教会複合体C、Dの中庭(小中庭)に設置したトレンチである。この一帯には陥没したような窪みがいくつか存在したことから、そのうちのひとつを調査した。その結果、深さ4m以上の井戸状ピットが検出され、下層から大甕と土製蓋が出土し、最終的にゴミ穴やトイレとして利用されたものと推定された。またピットは住居を切るようにして存在し、住居の床面からは12世紀頃の青磁碗の破片が出土している。

3. AKB-15区(シャフリスタン2中枢部)

AKB-15区はシャフリスタン2の中央部に位置し、唐が建設した碎葉鎮城の中枢部にあたる。当初、南北トレンチを設定したところ、瓦帯や3基程度の基壇遺構が確認されたことから、基壇1の規模や構造、基壇周囲の構造を明らかにするため、順次、調査区の拡張や新たなトレンチ設定を行い、調査を進めているが、2023年には8箇所のトレンチを設定し、基壇1の南側を中心に調査を行った。

その結果、基壇1の南約18mには、東西方向に伸びる回廊状遺構が確認された。その回廊には南門とみ



図8 南側の瓦帯



図9 南側の回廊状遺構と瓦帯



図10 石碑片



図11 漢語碑文片

られる基壇遺構が伴うことが確認されている。基壇1や南門の基壇規模は未確定ではあるが、基壇1は東西100尺×南北60尺(唐尺1尺=約31cm)で、その中心に建築基準点を想定すると、基準点から東西60尺の線上に幅20尺の東西回廊が位置し、北80尺の線上に幅20尺の北回廊が想定できるなど、規格性にもとづいて配置した建物群が想定される。基壇は土を硬く叩き締めただけの土壇で、基壇装飾はない。また基壇面は削平によって本来の高さを失っている。

また基壇1の南回廊の南側、推定南門の西側では数多くの瓦片や、大きささまざまな自然礫が多数出土し、それらが東西方向の帯状に堆積して検出され、礫の一部は円形に配石をなす部分があった(図8、9)。また瓦の破片や礫に混じり、中国式の石碑の螭首(碑首)の断片、「軍事」や「蕃」などの文字をもつ漢語碑文の破片(図10、11)が数点出土したほか、石碑の上部中央、碑額の左下にあたる「碑」の石片とわかる陽刻した文字がある。石碑の大きさは復元が難しいが、高さ数mの大型石碑とみられ、基壇1の南門外側の西に建立されていたことが推測された。なお、石碑は意図

的な破壊によって細片化したと考えられ、碎葉鎮を攻めた突騎施による破壊行為を示すものと推測したい。そのほか、灰白色のデコボコした砂岩片が、瓦や礫に混じって多数出土した(図12)。中国式の庭園に飾られた、いわゆる太湖石類似の石の破片で、炭酸カルシウムを含み、キルギス国内ではイシクル湖の湖岸に分布する。本来は大型の立石をなす庭石であったと思われるが、石碑同様に破碎された可能性がある。

そのほか、基壇1の南縁には、基壇と階段がなす西側の入隅付近に大型ピットが存在し、2022年より調査を実施している(図13-1、2)。排水に関連したピットとみられるが性格は不明で、覆土には基壇側から斜めに流れ込むような炭化層が堆積し、その上下には瓦片や土器、獣骨を多量に含んでいる。また小形で卵形



図12 太湖石類似石材



図13-1 ピット10 断面



図13-2 ピット10 断面

を呈した青銅製品用坩堝(図14)が複数出土したほか、
東方キリスト教会式(ネストリウス派式)真鍮製十字架
(図15)、青銅製コイン、溶解した青銅などが出土し、
周辺に青銅加工の工房が存在したことが推測される。
このピットは、唐の撤退後、最終的に火災で焼失した
建築材や瓦片などを片付けた廃棄坑として利用された
ことが考えられる。



図14 坩堝



図15 真鍮製十字架

4. おわりに

日本・キルギスによるアク・ベシム遺跡の共同研究
は、考古学的な調査のほか、動植物遺体の研究、遊牧
民に関する遺跡の調査研究や、コインや文字資料、周
辺の水路に関する研究、地理学、地形学、考古医科学

に関する研究など学際的に進められている。また
2024年夏には玄奘三蔵が越えたと考えられている天
山ベデル峠にあるキャラバン・サライの調査も計画さ
れている。

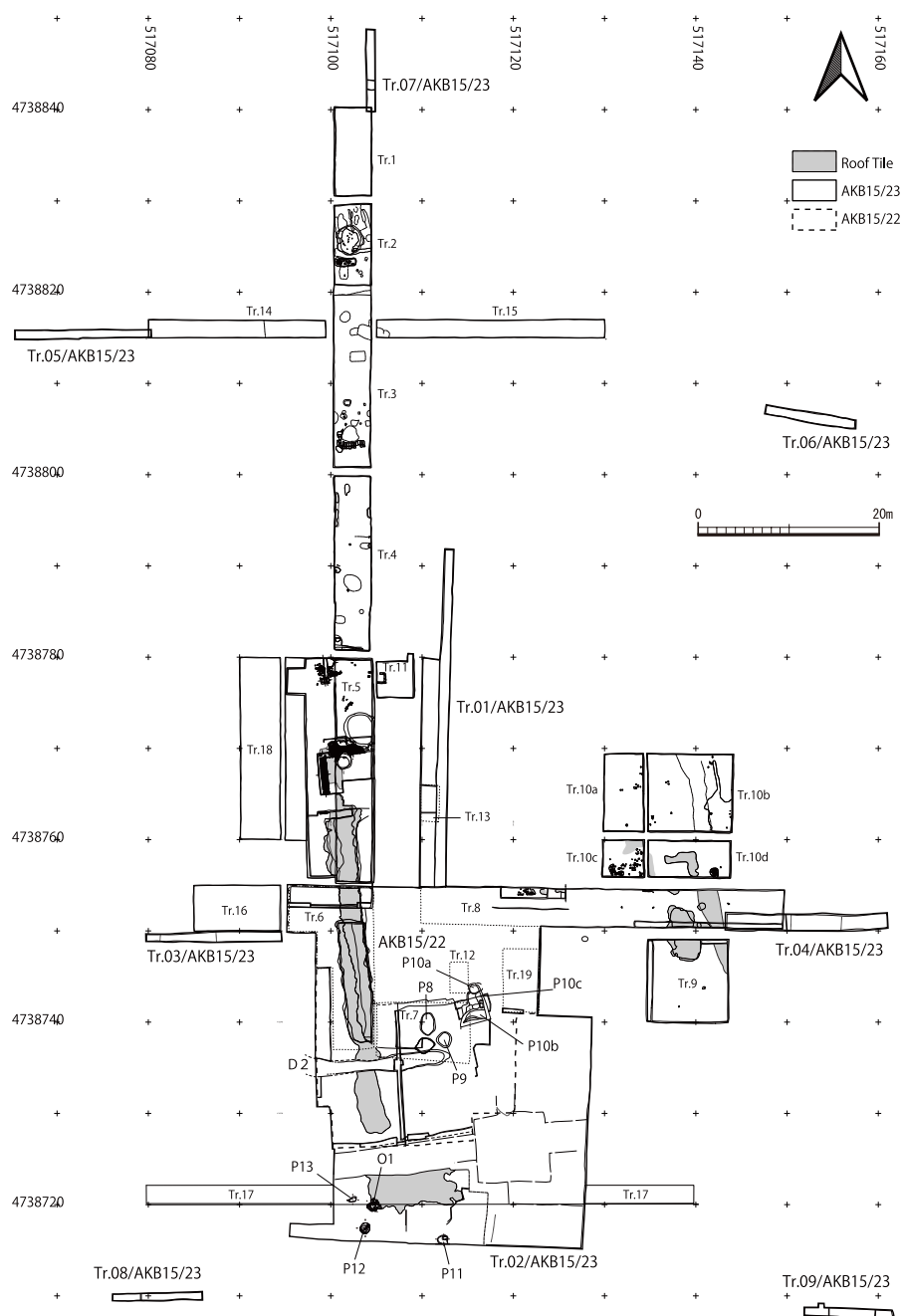


図16 AKB-15区基壇1の周辺

なお、この報告はJSPS 科研費 JP21H04984(基盤研究(S) 研究課題名：シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—、研究代表者：山内和也)の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- ・帝京大学文化財研究所(編) 2020『アク・ベシム(スィヤブ) 2019(帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告3)』帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
- ・帝京大学文化財研究所(編) 2021『アク・ベシム(スィヤブ)

2018(帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告2)』帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。

- ・帝京大学文化財研究所(編) 2022『アク・ベシム(スィヤブ) 2016・2017(帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告1)』帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
- ・山内和也 2019「アク・ベシム遺跡第1 シャフリスタンの都市プランの変化」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集 1-17頁 帝京大学文化財研究所。
- ・山内和也・岡田保良 2020「スィヤブ(アク・ベシム遺跡)のキリスト教会—第8号遺構：キリスト教会複合体—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 247-319頁 帝京大学文化財研究所。